



TITLE:

膀胱前腔嚢腫(ガングリオン)の1例

AUTHOR(S):

林正, 健二; 山内, 民男; 高橋, 陽一; 添田, 朝樹

CITATION:

林正, 健二 ...[et al]. 膀胱前腔嚢腫(ガングリオン)の1例. 泌尿器科紀要
1977, 23(2): 163-165

ISSUE DATE:

1977-03

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/122057>

RIGHT:

膀胱前腔囊腫（ガングリオン）の1例

大阪赤十字病院泌尿器科（主任：高橋陽一郎）

林 正 健 二
山 内 民 男
高 橋 陽 一

京都大学医学部泌尿器科学教室（主任：吉田 修教授）

添 田 朝 樹

PREVESICAL CYST (GANGLION): REPORT OF A CASE

Kenji RINSHO, Tamio YAMAUCHI
and Yoichi TAKAHASHI

From the Department of Urology, Osaka Red Cross Hospital

(Chief: Y. Takahashi, M. D.)

Asaki SOEDA

From the Department of Urology, Faculty of Medicine, Kyoto University

(Chairman: Prof. O. Yoshida, M. D.)

A case of prevesical cyst seen in a 41-year-old woman is presented in this paper. Operative and histological findings revealed that this cyst was a ganglion occurred from the pubic symphysis. This cases seems to be the first reported case of ganglion occurred from the pubic symphysis in Japan.

はじめに

膀胱後腔に発生した腫瘍については古くから報告がなされているが、膀胱前腔の腫瘍に関する報告は少ない。最近われわれは、膀胱前腔囊腫の1例を経験したので報告する。

症 例

患者：遠○ヒ○子，41歳，主婦。

初診：1975年5月27日。

主訴：精査希望。

家族歴：特記すべきものはない。

既往歴：16年前と12年前の2回出産。10年前左乳房良性腫瘍摘出術を受けた。

現病歴：1972年10月頃より月経のさい下腹部痛をきたすようになり、近医にて加療を受けたが軽快しなかったため、1974年11月当院婦人科を受診した。左付属器炎との診断の下に加療を受け、軽快していた。1975年5月、担当の婦人科医が恥骨後部に腫瘍を触れるの

に気づき、当科に紹介した。自覚症状は皆無であったが、精査のため6月5日入院した。

入院時所見：体格中程度、栄養良好。双手診にて恥骨後部に弾性軟、表面平滑な鶏卵大の腫瘍を触れる。

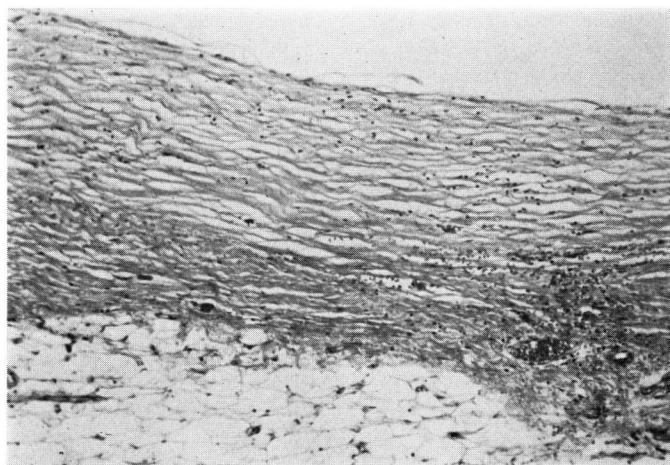
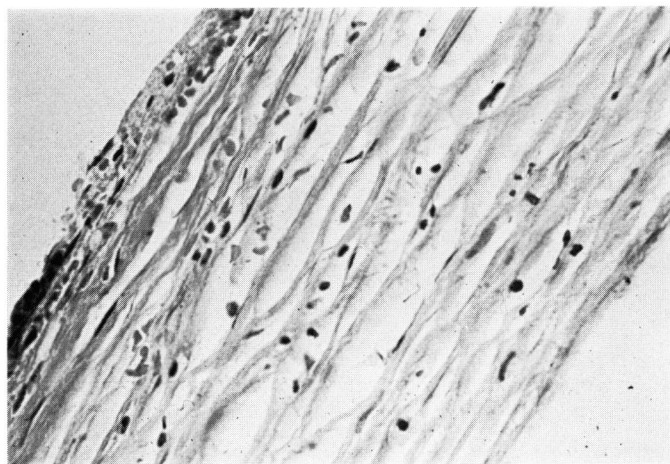
一般検査所見：赤血球数412万、血色素11.1g/dl、ヘマトクリット36%、白血球数3,300、血小板数30万、梅毒反応陰性、GOT 12u、GPT 7u、総ビリルビン量0.5mg/dl、血清総蛋白量7.2g/dl、血糖値92mg/dl、血清クレアチニン0.64mg/dl、BUN 15.6mg/dl、PSP排泄試験15分値40%、30分値60%、血清Na⁺ 4.4mEq/L、K⁺ 4.1mEq/L、Cl⁻ 100.5mEq/L、Ca⁺⁺ 4.4mEq/L、P 3.2mg/dl、心電図および胸部レ線写真は異常なし。

泌尿器科的検査所見：尿沈渣；異常なし。IVPおよび逆行性膀胱造影；前後面および側面とも異常なし。膀胱鏡検査；膀胱内に腫瘍はみられず、頂部より頸部にかけて軽度の突出所見を認める。

以上より膀胱前腔の腫瘍または膀胱外壁の腫瘍を疑い、6月11日腰椎麻酔下に手術を施行した。



Fig. 1. 摘出標本

Fig. 2. 囊腫壁 HE 染色 $\times 100$ Fig. 3. 囊腫壁 HE 染色 $\times 400$

手術所見：下腹部正中切開にて膀胱前腔に達したところ、膀胱前、恥骨後部に囊腫状腫瘍を認めた。腫瘍と腹膜、筋膜および膀胱壁とのゆ着はなく、剝離は容易であったが、恥骨後面においては骨膜および恥骨結合部とかたかくゆ着しており、剝離は容易でなかった。摘出標本は $5 \times 4.5 \times 2$ cm, 重量 32 g の囊腫状腫瘍であり、内容液は水に溶解しない淡黄色の半水様膠様物質であった (Fig. 1)。

組織学的所見：腫瘍壁の厚さは一定でないが全般に薄く、線維性結合織より構成されており、内面には明らかな上皮細胞は認め難い (Fig. 2)。ところにより腫瘍壁が扁平で細長な内皮状にみえる結合織様細胞から構成されている部分もみられる (Fig. 3)。

以上の所見よりこの囊腫は、恥骨結合より生じたガングリオンと考えられた。

術後経過：良好で、患者は術後16日目に退院した。

考 察

ガングリオンは滑膜または滑膜に関係をもって発生する囊腫で、手、足背、膝関節部などの健鞘、関節包の近くにみられ、中に透明なムチン様液体を満ちし、壁内側は被覆細胞で覆われず、線維性結合織からなると一般にはいわれている¹⁾²⁾。

われわれは、手術所見および摘出標本の内容液の性状や組織学所見からこの腫瘍をガングリオンと考えたが、四肢に発生するガングリオンはそれ自身良性の腫瘍であり、診断も比較的容易であるため、わが国においてはガングリオンに関する報告は少ない。またほとんどが、外科・整形外科からなされており、泌尿器科の領域からは報告されていない。

毛受ら³⁾の299例に関する統計的観察によれば、ガングリオンは男性よりも女性に多く、手関節に好発し、手関節以外の部位に発生する場合とは発生時年齢に著明な差異を認める (Table 1)。諸家^{3,4)}の報告もほぼこれに一致している。またガングリオンは手部以外に、他の関節軟部組織はもとより、膝半月板、神経、膝十字靱帯、骨、偽関節からも発生するといわれている⁵⁾。本症例のごとく恥骨結合より発生し、生前に発見された例はわれわれの調べ得た範囲内では、わが国

Table 1. 毛受らによる統計的観察

1. 発生時年齢	
手 関 節 部	24.4歳
そ の 他	34.3歳
2. 性 別	
男：女	1：3
3. 発生部位 (299例)	
手 関 節	73.2%
膝 関 節	5.6%
足 関 節	6.0%
指 関 節	3.6%
足 指 関 節	5.0%
中 足 部	6.4%

において報告されていない。

発生機序については、古来多くの説が提出されている。現在一般には Carp⁴⁾が述べた滑膜包や腱鞘の線維結合組織の粘液変性によるという説が認められているが、関節滑膜の脱出または滑液の漏出による等の説もあり、完全には解決されていない⁵⁾。

なおガングリオンは術後再発する傾向が強く、西山ら⁶⁾の報告では約20%に再発がみられており、本症例も今後経過観察が必要と思われる。

ま と め

41歳の主婦にみられた膀胱前腔囊腫（恥骨結合より発生したと思われるガングリオン）の1例を報告し、若干の考察を加えた。

本論文の要旨は第74回日本泌尿器科学会関西地方会で発表した。

文 献

- 1) 天児民和：整形外科概説，p. 160，南山堂，東京，1968。
- 2) 毛受松寿・ほか：外科治療，11：355，1964。
- 3) 永井 隆：外科診療，3：1579，1961。
- 4) Carp・ほか：荒井⁵⁾より引用。
- 5) 荒井孝和：日整会誌，41：809，1967。
- 6) 西山剛史・ほか：整形外科，21：1100，1970。

(1976年12月7日受付)